

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	LIU Dongbo
学位	博士(文学)
学位記番号	新大院博(文)第54号
学位授与の日付	令和元年9月20日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	井上靖の西域物に関する研究

論文審査委員	主査教授 堀 竜一
	副査教授 鈴木 恵
	副査准教授 角谷 聰

## 博士論文の要旨

本論文は、日本近代文学を代表する作家・井上靖の西域物作品を中心的な考察対象とし、日本近代文学における西域物の原点として、中央アジア探検と敦煌学の誕生・発展にまで遡り、宮澤賢治、松岡譲の西域物から井上靖の西域物への流れを視野に収めつつ、井上靖の西域物の文学的価値、現代的意義を考察したものである。

井上靖の小説は、現代物、自伝物、日本歴史を題材とする歴史小説、中国・朝鮮・中央アジア・ロシア等の歴史を題材とする歴史小説等と、多岐にわたるが、本論文は、その中でも中国・西域(シルクロード)をめぐる歴史小説に焦点を当てている。全体は、第一章から第三章の3部と、序章、終章とから構成されている。

序章では、本研究の背景と目的として、敦煌文書の発見、日本近現代における敦煌ブーム(敦煌熱)の背景と、宮澤賢治、松岡譲、井上靖の西域物作品との関連を概観している。

第一章では、日本近代文学における、井上靖の西域物に先行する西域物として、宮澤賢治の西域物と松岡譲の西域物を取り上げ、その原点として、中央アジア探検と敦煌学の誕生・発展とに着目し、さらに仏教との関連から考察を行っている。

第二章では、井上靖初の西域物である短篇「漆胡樽」(原型は詩「漆胡樽」)、その姉妹作といえる短篇「玉碗記」、初の本格的西域短篇「異域の人」の3作品を取り上げ、井上靖の初期・前期西域物の成立の背景、典拠資料との関連、創作方法、作品における対構造、人物像の特徴等を考察し、「漆胡樽」から「異域の人」への発展を辿っている。

第三章第一節では、中期西域物として、井上靖の西域物の代表作である、短篇「楼蘭」と長篇『敦煌』の2作品を取り上げ、典拠との関連を実証的に後付け、井上靖の中期西域物の創作方法を明らかにするとともに、西域物の人物像の特色を綿密に考察している。第三章第二節では、井上靖の中期西域物である短篇「洪水」を取り上げ、典拠との対比を通して、中国の西域経営（計略）における「屯田」の意味、「水・河（川）」のモチーフ、「生け贄」「洪水」の意味について、井上靖の自然観と関連づけて考察している。第三章第三節では、井上靖の後期西域物として、「崑崙の玉」「僧伽羅国縁起」「羅刹女国」の短篇3作品を取り上げている。「崑崙の玉」の考察では、典拠論と綿密な本文批判とを通して、「于闐の玉」「黄河の河源」といったモチーフや対構造が「崑崙の玉」で集大成されたことを明らかにしている。「僧伽羅国縁起」「羅刹女国」の考察では、大岡昇平との『蒼き狼』論争後の創作方法の改変の影響を見出し、両作品が宗教性を弱め教訓性・寓話性に重点を移していることを指摘している。

終章では、井上靖の西域物が現代にまで読み継がれていると、井上靖の西域物の文学的価値・現代的意義を指摘し、今後の課題を提示して、論文全体を結んでいる。

#### 審査結果の要旨

本論文は、井上靖の西域物作品を取り上げ考察した論文として、非常に高く評価できる。本論文の卓越する点は、おもに以下の二点である。

第一点目は、本論文の着眼点・発想・課題意識に関わるものである。本論文は、井上靖の西域物に着目し、精密かつ系統的・体系的に考察している。多岐にわたる井上靖文学の中でも、歴史小説、中国物に着目した研究は、これまでもなされてきた。とくに、中国物に関しては、近年、中国人研究者によって活発に研究が行われている。そこでは、西域物だけでなく、『天平の甕』や『孔子』などが研究対象として、広く〈中国（中華）〉〈漢文化〉という観点から、題材のリアリティーが問われてきた。しかし、本論文は、〈西域（シルクロード）〉に観点を据えることで、中国と北方西方の遊牧騎馬民族との関係、中央アジアにおけるさまざまな異民族・多民族の協調・対立抗争、東西文明の衝突と文化の伝播、さらには、中国と日本との歴史的文化的交流といった、〈中国（中華）〉〈漢文化〉という観点を相対化する世界的・文明論的問題群を掘り起こした。

さらに、本論文は〈西域（シルクロード）〉という題材の原点を、19世紀末から20世紀にかけての、中央アジア探検と敦煌文書発見、敦煌学の誕生・成立・発展に求め、日本近代文学への影響を、宮沢賢治・松岡譲の二人を取り上げ、整理している。その流れの中に井上靖の西域物を位置づけることで、日本人作家が西域物を創作することの意味、その西域物を時代・文化・言語を越えて読むことの意味といった問題群に新たに光を当てた。このことで、〈日本（日本文化）〉〈日本文学〉の定義そのものに再考を促している。

本論文の卓越する第二点目は、本論文の研究方法に関わるものである。井上靖の歴史小説は膨大な歴史資料、歴史研究文献等に基づき創作されている。したがって、歴史小説研究は、基本的に、それぞれの作品に基づいた典拠を探り出し、典拠の記述と作品本文との異同を明らかにし、史実と虚構を腑分けし、そこから作品の意味・価値を見出すという典拠論が基本となる。西域物研究の場合も、これまで典拠論はなされてきた。しかし、本論文は、『史記』『漢書』『後漢書』『法顕伝』『大唐西域記』等の中国の基本文献はもちろん、中国の歴史書・地理書、研究書等を博搜するとともに、日本人による翻訳・研究書である、羽田亨『西域文明史概論』、市村瓚次郎『東洋史統』、上原芳太郎編『新西域記』、堀謙徳『解説西域記』等々にも広く目配りをし、典拠と作品との対応関係を、詳細にわたり具体的に明らかにしている（その点で、とくに「洪水」論、「崑崙の玉」論は秀逸であり、数多くの新知見を提出している）。この点は、日中両国語の高度な語学力を有し、日中両国の文化的背景に通暁した LIU 氏ならではの強みであり、本論文が先行研究を大きく越えるところでもある。

本論文は、その精緻な対照作業に基づき、日本人研究者の先行研究はもちろん、中国人研究者による研究（日中両国語）にも丹念に目を通し、作品に見られる対構造、登場人物像などを手掛かりに、作品論を展開し、新たな解釈や作品評価を数多く提示している。

また、松岡譲『敦煌物語』に関して、今日忘れられた作家であるとして、松岡譲の原稿等の資料を、長岡市郷土史料館で調査するとともに、松岡譲の娘で夏目漱石の孫娘でもある半藤末利子氏へインタビューを行うなどして、独自の調査活動を通して、『敦煌物語』の成立の背景、作品の価値について考察を行っている。この点も本論文の成果として高く評価できる。

本論文の課題は多々指摘できる。日本近代文学における西域物の原点とされる中央アジア探検と敦煌文書の発見、敦煌学の誕生・成立・発展の歴史的・文化的背景について、大谷探検隊やヘディンら各国探検隊の記録の大正期における受容の実態と、当時およびその後の日本人の、〈西域（シルクロード）〉に対する知識・理解・イメージ形成の全体像について、『敦煌』の読者論的・影響史的研究について、西域物における仏教・戦争の題材の持つ意味について、昭和40年代における井上靖の文明批判への傾斜と西域物との関係について、宮澤賢治・松岡譲・井上靖の西域物と中島敦などの西域物との関係について、等等である。しかし、これらはいささかも、本論文の価値を損なうものではない。むしろ、いずれも、今後の研究課題として大いに発展性が期待できるところである。西域から出発した井上靖の世界観は、さらに、中央アジア（『蒼き狼』『古代ペンジケント』『聖者』）、朝鮮半島（『風濤』）、ロシア（『おろしあ国酔夢譚』）へと拡大してゆく。本論文は、そのような世界観にまで課題意識を発展させることで、井上靖の西域物の文学的価値・現代的意義をさらに解明し、そのことにより、〈日本（日本文化）〉〈日本文学〉の定義をさらに問い直してゆくものと思われる。

以上のことより、審査委員会は、本論文を学術的に非常に高い価値を有する文学研究と認め、本論文に対し博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。